騎士 chevalier

フランス・ハルスは17世紀に活躍したオランダの画家である。《微笑む騎士》（1624年）は、17世紀前半の典型的な洒落者の装いをしている。服飾史の中では、この時期のモードは「オランダ風」が最先端をいっていて、男性の服装は「騎士風」と呼ばれるスタイルが流行していた。身分によっては大きな羽根飾りをつけたつば広の帽子をかぶり、少し短めの暗色の上衣を着て、中に美しい白いレースのついたシャツ（シュミーズ）を身につけ、膝丈くらいの半ズボン（キュロット）を穿いているはずだ。おそらく、足元には膝下くらいまで覆う大きな革のブーツを履いていたことだろう。あるいは、マントを片方の肩だけに羽織り、風にはためかせる姿もよく見られる。この《微笑む騎士》の服装は、上半身しか描かれていないが、まさしく、そのような「騎士風」ファッションに相当するといえる。

言うまでもなく、騎士とは、馬にまたがり、腰には剣を携え、戦場で戦うことが身上の勇者である。しかし、17世紀前半の「騎士風」ファッションは、いかにも勇ましい形容がなされたものであるけれど、目に眩い真っ白く繊細なレースの襟やカフスも印象的である。この肖像画には見えないが、場合によってはリボンをあちこちにつけたり、さらには、口紅など化粧を施していることもあった。「騎士風」ファッションは、現代人の感覚からすると、意外とフェミニンな印象をも与えるスタイルなのである。

フランス・ハルス
《微笑む騎士》
1624年、ウォーレス・コレクション

17世紀のレースは、もちろん貴族の女性たちも身につけていたが、男性も負けず劣らず美しいレースには目がなかった。当時の貴族たちにとって、白いレースを襟元や袖口や膝がしらなどに身につけるのは、一種のエチケットとして求められていた。当時大流行していた礼儀作法書などをみると、そのあたりの事情はよくわかる。17世紀は清潔感という新しい感性が育まれた時代でもあるが、清潔であるためには、白いリネン類、つまり白いレースが不可欠であった。水が必ずしもきれいであるとは言えなかったこの時代、素肌に身につけるリネン類とレースの白さによって、清潔であるか否かがはかられていた。真っ白いリネン類とレースは高価だったため、誰もが身につけられるものでもなかった。ゆえに彼らは、その白さをできるだけアピールしていたのである。その白さは、多くの場合、黒い上衣とのコントラストで美しく映え、装い全体のアクセントになっていた。

ハルスの描いた騎士も同様である。黒い上衣の袖には切り込みが入っており、そこから、中の白いシュミーズをあえて見せるようにしている。レースの襟飾りとカフスは、いずれも、フランドル地方のレースであろう。襟にはその薄く繊細なレースを少なくとも三枚は重ねている。命のやりとりをする騎士の姿には、儚さも共存する。

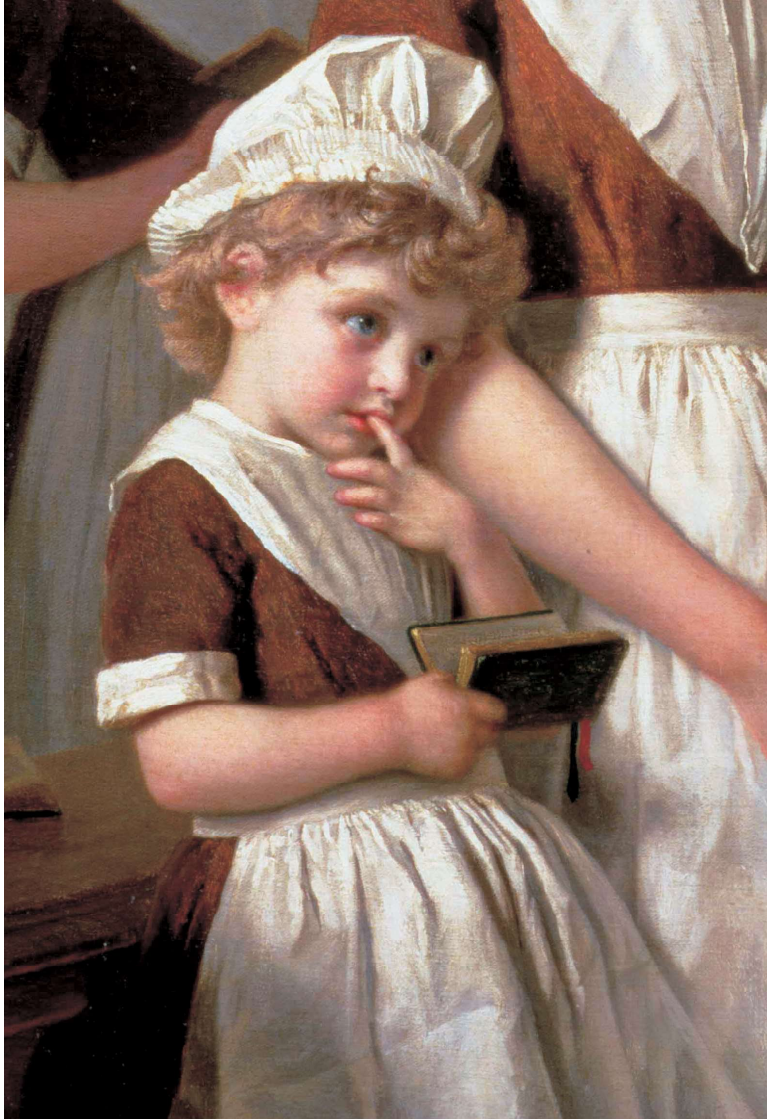
ソフィー・アンダーソン
《チャペルで祈る孤児の少女たち》
1877年頃、ファウンドリング美術館

・孤児 orphelins

西洋において捨て子や身寄りのない子どもは、修道院などの宗教施設が併設する孤児院で育てられることが多かった。すでにルネッサンス期の頃には、いわゆる赤ちゃんポストのような施設に備えられた小さな回転扉のような箱に入れて、子どもを預けることが行われていた。多くは経済的な理由や、望まない妊娠によって生まれた子どもたちであり、西洋ではそうした子どもが相当数いたことが知られている。修道院では聖職者の指導のもとに、子どもたちが毎日の日課やお勤めを果たしながら、敬虔（けいけん）な信徒として育てられた。

そうした孤児たちの衣服がどのようなものであったか、簡単に知ることはできないが、基本的には質素な服装をしていたはずである。本作に描かれている少女たちは、茶色の簡素なワンピースを身にまとい、白いボネ（縁なし帽）と、白い襟飾りと、白いエプロンを身につけている。

この茶色のワンピースは、修道士の衣服を想起させる。修道士は基本的に清貧の生活を旨としているので、無染色で暗色の粗末な衣服を身につけて生活をする。慎ましく、敬虔なクリスチャンであるために、あらゆる装飾や華美なものは排除するというのが、その信条とされた。孤児たちが品行方正に生育されることを願う、孤児院の指導者たちは、道を踏み外したり、道徳的に誤った方向に走っていかないよう、このような統一された衣服で、ある意味



管理し教育したものと想像できる。

さらに白いボネと、白いシンプルな襟飾りと、白いエプロンも、やはり同様に、敬虔なクリスチャンとして生活していくための衣服としてふさわしかった。専門的に白いリネン類を扱うランジェールと呼ばれるリネン屋は、古くから存在していた。たとえば、18世紀フランスのランジェールは、白いリネンでできた下着類を製造販売するのがその仕事の中心ではあったが、いっぽうで教会に納める白いリネン類も扱っていた。教会の宗教行為には白いリネン類が様々に利用されてきたからである。17世紀頃から多く出版され、子どもたちの学校でも読み親しまれた礼儀作法書などを見ると、子どもたちが清潔であることは、非常に重視されていたことがわかる。白さは17世紀頃から明らかに「清潔」のイメージと深く結びついてきた色である。白い清潔な身なりをすることは、その子の純粋無垢な心のうちを表すものでもあり、宗教的な慎ましさと敬虔さを非常によく表現するものであった。18世紀の思想家ヴォルテールは『女子教育』という詩の中で、「簡素な清潔さこそ、彼女の装身具になるのだ」と明言し、簡素で清潔な衣服が女子教育に果たす意義を強調している。

服装を定めている。それによると、統領は儀式の際には赤いアビ（上衣）を身につけることになっていて、やはりそこには金糸の刺繍が施されている必要があった。特にナポレオンの身につける衣服の刺繍は、パルメット（棕櫚の葉をモチーフにした装飾文様）を表しているのが特徴であった。ただし、本作の金糸刺繍がパルメットかどうかは、残念ながら判然とはしない。

また本作で彼の姿が雄々しく見えるのは、馬のダイナミックな動きとともに、大きくはためく朱色のマントの効果もあるだろう。この色はおそらく「ナカラ」"nacarat"と呼ばれる色で、ナポレオンが第一統領になる以前の総裁政府時代に、総裁が身につけた色であった。赤というよりは、橙色に近く、さくらんぼ色とバラ色の中間の色と説明される。このナカラ色のマントは、総裁政府時代に国家儀式などの重要な場面で、総裁が身につけることになっており、ナポレオンもそれを継承しているのかもしれない。

帽子はビコルヌ（二角帽）である。旧体制下では、貴族の帽子はトリコルヌという三辺が折り曲がった三角帽であったが、18世紀の終わり頃から、二辺が折り曲がったビコルヌが流行ることになった。ナポレオンのトレードマークともいえる帽子で、この帽子も彼の地位を示すべく、金糸のブレード（ガロン）のようなもので装飾されていることがよくわかる。

花売り娘 Marchande de fleurs

花売り娘の仕事はかなり古くから存在した。すでに13世紀には人頭税の台帳に、その職名が記載されている。税も納めるれっきとした職業として成り立っていた。特に、生花が宗教儀礼の中で不可欠のものとなると、彼女たちの仕事は重要な生業となった。もちろん、祝祭のときにもふんだんに花は用いられたし、年間を通じて花屋の仕事は、フランスの人びとの生活にまさしく花を添えていた。

花売り娘たちは早くから同業者組合を作っていたが、その最終的な規約は1677年及び、1735年のものだという。この規約の中で、彼女たちは「花売りの女親方兼花冠製造販売を行う女性業者」と定められる。「洗礼、結婚、埋葬用などに、生花の花束、帽子、冠、花輪を取り揃えて販売する」という権利を専有する人びとと位置づけられた。この組合は既婚を問わず女性だけで構成され、見習いとしての修業期間が4年、さらに一人前になるまでに2年の修業期間があった。専門職でもあり、公的には誰もがなれるわけではなかった。

しかし、実際には、街頭で、自ら摘んできた花をほそぼそと売っている花売り娘も存在していた。西洋絵画に描かれている花売り娘をみると、様々な女性たちが存在している。こざっぱりとした洒落た衣服を着た若い女性から、老婆や、田舎から野良仕事の後にそのまま出てきたような女性である。

ミシェル・ガルニエ
《パレ・ロワイヤルのアーケードの洒落女》
1787年、個人蔵